

魂の行へ (民謡)

太田 赤童

山の夜の静けさ
牙え切つた數知れぬ星
巨獸の眠てるやうなだんまりの嶺
永久の存在は、
自然？
人生？
神祕主義者は自然に驚異を求めた、
自然主義者は人生に裸體を求めた、
醜い主義者は次から次へと
いろいろの騷擾を醸しつゝ……。
大生命の壺をさゝげて
踏跟めきつ何處へ何を求めて、
あなあわれ……
魂の香泌む壺とも知らで
青き月の光りに
森の奥深く影は次第に消えゆく。

(一一、九、二六)

調落の初冬

小松 觀學

樹々は日々に衣を剥がれて慄えて居る
風は面白そうに落葉を轉かして驅けて行く
薪を負ふた女は白い息を吐きながら通る
後からからくくと落葉が走つて行く
荒涼たる山路!……。
向ふの山々は疲れ果てた太陽の弱い日脚を受けて茜
に
染まりながら暮れを惜しんで居る
そして初冬に這ひ寄つて來たのである
と遠くで夕鐘を撞いて居る。

遠くなります (七面山)

結 城 光

遠く鳴ります
あらしぎ山に
鐘は寒空
遠黄。

玉はとびちる (みのぶ)

玉はとびさる
青いろ水は
みをやたまやに
ほろとなく

ちらりくく (寮の窓から)

ちらりくくと
涙に光る
星のなくのに
なせなかぬ

菊

久遠寺の庭に咲きける白菊の心うれしく香りつるかな
田川 恵良
白菊の盛りと見ゆるさ庭べに朝日さすなり寺の静けさ
同
久々にみ山訪づれ庭菊のなつかしう見ゆ花の色と
同
香

さ庭べの東をさして咲き匂ふ園にはの見ゆ菊のま盛り
同

山寺に菊の盛りとなりぬれば土の香いこゝなつかしき哉
同

我が庭に秋訪れて白菊のいま、盛りと咲きにはふたべ
同

鉢菊の枯れたる夕べに法の雨恵みに生えて又盛りぬ
同

秋ふけて薄き黄色に咲き出づるさ庭の小菊懐かしき哉
同

杉櫃のもとに一本寒菊は霜にうたれて淋しく笑めり
下田 雨女

秋 愁

夜もすがら吹きにし風にもなやむ昔の衣につゆ結びけり
田川 恵良
秋くれば寂しさましぬさ庭べに鈴虫の啼く夕べなるかも
同
もの憂ふるわが此の頃の顔をやせませりよご君はいわるも
今 泉 智 旭
つくづくそわが淋し顔をながめゐる我が身の如く君